# 音まち 千住の縁

http://aaa-senju.com


1　千住タウンレーベル、はじめました
2-3　イミグレーション・ミュージアム・東京 座談会　畳の上のカーペット
4-5　だじゃれ音楽研究会 熱タイ音楽隊の一週間
6　千寿青葉中で6年目のメモリバ 踊る！フィリパピポ!!


「アートアクセスあだち 音まち千住の縁」（通称「音まち」）は、
アートを通じた新たなコミュニケーション（縁）を生み出すことをめざす
市民参加型のアートプロジェクトです。
足立区千住地域を中心に、市民とアーティストが協働して、
「音」をテーマにしたまちなかライブ、ワークショップ、トークイベントなどを展開します。

春まち号

# 千住タウンレーベル、はじめました

秋にスタートした新プロジェクト。
市民のタウンレコーダー（記者）とともに、まちとくらしと音とを、ていねいに紡いでいく。
まずは、ゲストを招いて勉強会を開いたのち、複数回のワークショップを通じて、
音とメディアの関係や、〝編集〟という視点について理解を深める。
さらには、このプロジェクトの肝である「音盤千住」の制作にとりかかる。
この「音盤千住」には、一人ひとりの記憶のかけらを詰め込んでいく予定だ。

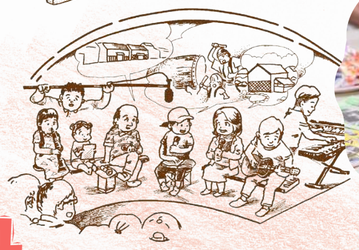
イラスト：宮田篤

**1** 千住のまちについてのリサーチ。住んでいる人の話を聞いたり、まちにまつわる音への理解を深める。

**2** タウンレコーダーがまちに飛び出し、実際にインタビューしたり、現場の様子を見に出かける。

**3** 小さい頃の思い出や、今印象に残っている音について話を聞く。

**4** 取材を踏まえて、タウンレコーダーたちが独自の視点で音や記憶を再編集。



**5** 音や記憶をCDや冊子というかたちあるもの、「音盤千住」にまとめる。

**6** 「音盤千住」は千住のあちこちで配布したり、まちなかの拠点などでコレクションも!?

**7** 「音盤千住」を聴きながらまち歩き。まちの人に思いを馳せるという楽しみ方もあり。

**8** まちなかの拠点では、「音盤千住」をきっかけに新たな縁を紡いでいく。



こんにちは。「千住タウンレーベル」発起人のアサダワタルです。タウンレーベルってのは僕の造語ですけど、まず、どこのまちにもわりあいみかけるタウン誌の編集室をイメージしてみてください。

タウン誌って、そのまちに住んでいる普通の人のインタビューが載っていたり、そこに住んでないと行かないだろう地元の名店が紹介されてたり、あと「これ譲ります／これ探してます」的なローカル感たっぷりの企画が満載ですよね。ああいうのを文字だけでなく「音楽（音）」として発行してみたらどんなことが起こるのだろう？っていうのが、この取り組みのシンプルな動機なんです。

といいつつ、なんでそもそもそんな発想を持つに至ったのかって話は、ていねいに語ると長くなるんだけど、ここでは音楽ってライブやフェスみたいにわーっと盛り上がる非日常を生み出す存在であると同時に、私たちのとりとめもない日常をフワフワ優しく包みこめる、もっと「普段使い」な存在なんじゃないかなって思っていること。そして、その使い方のひとつとして、音楽は個々人の暮らしにまつわるさまざまな「記憶」を呼び起こしてくれる非常に重要な存在であること、の２点を掲げておきます！

だから、「音楽 × 記憶 × まち」というキーワードで、一緒に楽しいワルダクミをしてくれる人（タウンレコーダー）を募りました。千住のまちの日常を、音楽でほんのりヘンテコに編集して、惜しげもなく言いますけどもっと「幸せ」になりましょう。

アサダワタル さん

装丁：森本純平・石橋雄太郎・西垣友理・山口三幸　伊藤左千子／編集：置山紗矢・松原麻佑・長澤良子／製作：清倉紀子／デザイン：深谷圭・山口夏生
主催：東京都アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）東京都新人芸術家育成事業・大学院国際音楽研究科 特定非営利活動法人音まち計画／足立区





# 音まち かわらばん

## 音まちで出会う、素敵な人々を紹介します

写真：吉田武司

千住の人紹介 6　「知らない路地の映画祭」脚本担当　阿部 吉光 あべ よしみつ

## 千住の人紹介 6　路地と旧家で大人のかくれんぼ

### 大人のかくれんぼを映画に

脚本っていうのは自分の場合、できるときにはポーンってできちゃうんですよ。できないときには何をやってもできない（笑）。今回つくる映画「かくれんぼ」は、まち歩きの後、仲町の家でみんなと話して帰って、すぐにポン！ってできちゃいました。この家で、特にあの不思議な屋根裏でかくれんぼさせたら面白いだろうな、廊下も座敷わらしを走らせたら面白いだろうなって。法学部で刑法を専攻していたこともあって、もともとサスペンスやSF的なものが好きで、自分が一番しっくり来るのは「世にも奇妙な物語」的なものなんです。その後、メンバーのメーリングリストで、行きつけのバーを使わせてもらえるかもしれないって話があって、バーからこの家まで千住の路地を通って、まちなかのかくれんぼもすることで、摩訶不思議な感じを出したいなって思いました。大人がかくれんぼするってこと自体がありえないので、どういう設定なら自然に連れてくることができるかなと。

### ２人の喧嘩が心配で心配で

４年ほど前に北千住駅前のカルチャーセンターで脚本教室に参加したんです。自分の脚本を書きたいという強い思いはなくて、定年後でしたので、好きな映画やテレビを見るときにもっと楽しめるようになるんじゃないかなと思いまして。でも勉強したら逆にアラばかり目につくようになりました（笑）。そのときは１時間もののサスペンスドラマを１本書いたら憑き物が落ちたというか（笑）。ですが、脚本という紙切れから立体的に映画が立ち上がってくるって経験はしてなかったので、1年前に区報で自主映画制作プロジェクトの募集記事を見つけて「あー、面白いのがある」とピンと来た。アルツハイマー対策です（笑）。そんなことでもないと、退職して家にいて、まったく頭使わないですからねえ。

そのときは、本当に映画できるのかなって思いましたが、できましたね。それはすごいと思いました。まとめていったアーティスト・友政さんの力と、たこテラスや音（おと）の風屋（ふや）っていう拠点があったことが大きいと思います。楽しかったこと？ それはユニークな仲間と巡り合えたってことです。

多国籍なチームだったので、その場で英語のシナリオを書き直したりして、頭の訓練にはなりますよね。戦場みたいだった、とも言われますけれど（笑）。マイペースで場の雰囲気でどんどん変えてしまう監督と、かっちりとやりたい助監督の間で、２人が喧嘩しないか心配で心配で、調整役をしてました。喧嘩でこの映画が空中分解してしまうのが一番怖かったから。

ヤクルト本社で定年まで働きましたが、長く海外にいたんです。ブラジルと韓国と、日本から遠い国も近い国も経験して根性はつきましたね（笑）。

### どんどん変わっていきます

撮影してるとき、まちのみなさんは好意的でしたよ。「何やってんの～？」と話しかけてくれたり。大川町では、ここ曲がれるんだとびっくりするような路地があって面白かったです。柳原のキデンキ（裸電球の街路灯）は、近所のおばさんが「あんなの、暗くて邪魔で」なんて言ってましたけど（笑）。昔と今がうまく調和してるのがいい。まあ私らが勝手に言ってることですが。ひらめきにつながるものがたくさんありますね、千住は。でも、そんな健全な千住だけを出すのでなく、裏の部分や、実はコミュニティに出てこないご高齢の方や引きこもりの人がいることも表現したいって監督は言っていて、「社会からのかくれんぼ」ですね。みんなと話すうちに、どんどん変わっていきます。さあどうやって社会性を盛り込むのか、今のところはなかなかまとまらないですね。でも言われたことを直せば、どんどん良いものになっていくのは確かです。

２年目ということで、前回大変だったキャスティングも今回はイメージできてますし、全体に「何とかなりそう」な感じです。年齢も普段やってることもバラバラのメンバーですが、「何か面白いことやろう」って感じだけは共通してます。決して「映画をつくるために集まるんだ！」って感じはない。本当は、みんなでぐだぐだ飲んでるのが一番面白いですよ（笑）。

### Profile

静岡市出身。足立区島根在住。結婚により奥様の実家がある足立区に本籍を移す。
株式会社ヤクルト本社に在職中、ブラジル に４年、韓国に13年派遣され、多くの修羅場を乗り切る。
現在は週４日、障害者送迎の仕事を手伝い、
週１日は近くの住区センターで健康麻雀（飲まない・吸わない・かけない）を楽しんでいる。
２０１５年度の千住・緑レジデンス 友政麻理子「知らない路地の映画祭」で２本の脚本を手がけた。
今年度は新作「かくれんぼ」の制作に奮闘中。

## イミグレーション・ミュージアム・東京 座談会

阿部初美×佐藤慎也×岩井成昭　聞き手：熊倉純子

# 畳の上のカーペット

**夏から秋へと移り変わる頃、由緒を感じる日本建築に現れた、異文化との出会いの入口。
9月には外国語の聖歌や賑やかなしゃべり声が畳の空間を満たし、
10月には障子の合間からどこか懐かしい千住の風景が写真を通して語りかけてきた。
音まちの新しい拠点「仲町の家」で開催された2つの展示を振り返る。**

## 日本家屋を異文化の出会いの場に

**熊倉**　「イミグレーション・ミュージアム・東京（以下IMM）」は、移民の概念がない我が国において、在留外国人との共生について考えるための契機をアートを通してつくるという企画です。美術家の岩井成昭さんが2010年に始められ、2013年からは音まちのメインプログラムのひとつとして展開しています。

今回の音まちのIMMでは2つの企画を開催しました。ひとつは、足立区に多く暮らしているフィリピン系の方々のインタビューを綴る、映像インスタレーション。学生が長期にわたって構築した関係に基づいて行ったインタビューを、演出家の阿部初美さんが映像作品に構成されました。撮影は映像作家で藝大千住キャンパスの卒業生でもある冨田了平さん、展示の空間構成は建築家の佐藤慎也さんにそれぞれご担当いただきました。もうひとつは、千住に30年暮らすデンマーク人ジャーナリストのケント・ダールさんが80年代から90年代に撮影した写真の展示。膨大な量のネガから岩井さんが40点ほど選び、展示の空間演出もなさいました。

まずは阿部さん、今回フィリピンのみなさんと出会って、作品をつくられてどうでしたか？

**阿部**　実は、学生のときに田舎の温泉のバイト先でフィリピン人の集団の女の子たちに出会っていたんです。みんな陽気に歌って、踊りながらお風呂場の掃除してて、すごくフレンドリーで。お部屋にはキリスト教のマリア様とかの置物がたくさんあって、「はあー、すいぶん熱心なんだな」と思ってね。今回、彼らの話を聞きながら、そのときに感じたことに再会したようでした。フィリピンと聞くとパブとか〝俗〟のイメージが強いけど、彼らは〝聖〟の部分をすごく強く持っている。今回意識したのは、そっち側から紹介していくということ。フィリピンのみなさんはミサの中で神様と、自分と対話しているわけですが、作品を通して自分自身や世界と対話していくアートもそれと似たところがあるんじゃないかと思って。なので、フィリピンの方たち一人ひとりとお客さんが対話できる場所をつくることを目指しました。

**熊倉**　佐藤さんは「フィリピンからの、ひとりひとり　マキララ ー知り、会い、踊る！ー」の会場構成にはどんな工夫があったのでしょう？

**佐藤**　映像インスタレーション展示（「知る」Their history, to be our story）は、どのようにフィリピンの人たちが日本での住環境を過ごしやすくアレンジしているのかをヒントにしました。だから、普通の日本の家であれば開け放ってつながっていくような空間を仕切ってカーペットを敷いたり、ステンドグラスみたいなものをつくったりしたんです。それに対して、岩井さんが空間構成なさった写真展は、日本的空間を存分に発揮させた使い方でしたね。いろんなところを開け放ってその奥に展示して、重層的に使ったり。会場は同じ一軒の家なんだけど、もとの題材がいかにもの日本家屋だからこそ、プロジェクトの性質に合わせて使い方が異なるかたちで出てきたのが印象的でした。

**岩井**　写真展の場合、写真は矩形（くけい）のフレームなので、日本家屋の構図にハマり過ぎちゃうんですよ。だから、ずらすのが大変でしたね。あと、小技の効いた家だから、その持ち味を生かしたいなと思って。例えば、幅の狭い廊下。あの使い方のイメージは、ちょっとマニアックなんだけど、小津安二郎の映画のローアングルですね（笑）

## コミュニケーションツールとしての写真

**熊倉**　岩井さんは、IMMのディレクターとしてだけでなく、今回は、表現者の立場からも携わられましたよね。写真はどのように選定されたんですか？

**岩井**　ケントさんの作品を、本人とは違う見方をするよう心がけました。たとえば、いろんな店主の写真のシリーズがありますが、カメラ目線で商売道具を手で持っているようなものが多い。ジャーナリストのケントさんとしての決定打はこちらだと思うけど、僕はむしろ被写体が無防備になっているショットを選びました。なぜならその無防備な姿こそ、コミュニケーションが交わされて、被写体がカメラに対して気を許していることの証に思えたからなんです。

**阿部**　当事者が当たり前だと思っていたことを異質な目で見て、今まで見えてこなかった部分を引っ張り出すというのは、アーティスト岩井成昭の得意な手法ですよね。

**熊倉**　ケントさんはジャーナリストだからこそ、対話しない存在としては対象を見ていなくて、写真は話を聞くロ実、ツールにしているんですね。会場でも、写真を積んでまちに繰り出した屋台の周りでも、自分が撮った昔の写真を介して、今の人たちと千住の消えていったものについて語るのを、彼自身もすごく楽しんでいました。あと、彼の話で印象的だったのは「千住はパリ説」です。クレープ屋とか、焼き栗屋とか、路上や屋台で食べ物を普通に売っているのが、パリの日常の光景。それからマルシェとか個人商店が元気な部分がまだまだあって。その個人商店では常連さんとの世間話がすごく重要な商売道具で、他のお客さんはその間待たされちゃう。人情というか、そういうところが非常にパリっぽいということでしょう。

**岩井**　彼が言ってたのは、お店の店主は芸人じゃないとダメだ、サービス精神があって他者とコミュニケーションをとる能力がないと商売がうまくいかないと。その芸人が勢ぞろいしているのが千住のイメージなんですって。

僕が今回一番興味を持ったのは、ケントさんが80年代とか90年代の頭くらいにこういう写真を撮り始めたときに、その隣に僕らがいたら、彼と同じような視線で面白がっていたのか？っていうこと。僕らも今やっと、なくなっていくものに対してのノスタルジーが募ってきてケントさんと同じ視線になってきた、それが非常に面白いなと思ったんですよね。ケントさん曰く、写真家は常に良い写真を撮れないといけないけど、どんなにスキルがあっても、大事なのは時代が変わっていく瞬間に立ち会うかどうか。彼の場合はそれが千住の変化で、その変化を残したいと思ったから写真を撮った。そうじゃないときには彼は撮らない。

## ハコをもたないミュージアムは可能か

**阿部**　今回やってみて、私の中国人やスリランカ人の友達から「私たちともやってほしい」という声が寄せられて、こうした試みのニーズが大きいことを痛感しました。やっぱりアートの役割って大きいと思うんですよね。全然知らない人同士を繋いでいくとか、とっても得意なんじゃないかな。ぜひ日本中の美術館や劇場でも、IMM的な試みをやってほしいなと思います。

**佐藤**　活動を継続的なものにするためには、場所の問題はどうしても出てきちゃうのかな。ここ10年、建築をやりながらアートプロジェクトに足を突っ込んできて、施設とか制度によってはできないことも、できる可能性があると感じています。制度と呼ばなくてもいいところで、固定化することをうまく回避して続けられたらいいですよね。

**阿部**　だから「IMM埼玉」みたいな感じで（笑）まずは私の埼玉の家でやろうかなって思ってます。

**熊倉**　IMMに3年携わらせていただいて、日本のイミグレーション・ミュージアムは、一人ひとりが自宅で始めるとか、NPOが異文化ハイブリッドなものを集めてみるところから始めるといいのではないかと思います。そうやってシステムを自分たちで勝手につくるようなことができたら、すごい市民力だなって。

＊6面にフィリパピポ!! 開催報告を掲載

写真：冨田了平（企画・撮影）　構成：佐藤慎也（展示）

**阿部初美**
あべ はつみ
演出家

にしすがも創造舎レジデント・アーティストとして東京国際芸術祭を中心にドキュメンタリー的な作品「4.48サイコシス」「アトミック・サバイバー」などを発表。
東京藝術大学、地域創造リージョナルシアター事業、全国の公共劇場などで講師を務める。2010年に出産後、「産み育てを考える ワークショップ」を全国4都市で実施。子育てをしながら舞台にとどまらない表現を探求しつつ活動中。

**佐藤慎也**
さとう しんや
日本大学理工学部
建築学科教授

建築に留まらず、美術、演劇作品制作にも参加。「＋1人／日」（2008 取手アートプロジェクト）、「個室都市 東京」ツアー制作協力（高山明演出 2009 F/T）、「3331 Arts Chiyoda」改修設計（2010）、「アトレウス家プロジェクト」（2010-16）、「としまアートステーション構想」策定メンバー（2011-）、「長島確のつくりかた研究所」所長（2013-16）、「←」プロジェクト構造設計（長島確＋やじるしのチーム 2016 さいたまトリエンナーレ）など。

**岩井成昭**
いわい しげあき
美術家

イミグレーション・ミュージアム・東京 主宰。
1990年より国内および欧州、豪州、東南アジアの特定コミュニティの調査をもとに、映像、音響、テキストなどを複合的に使用した視覚表現を展開。近年はあらゆる世代を対象にしたワークショップや、多文化研究活動を並行して実施中。
秋田公立美術大学教授、東京藝術大学非常勤講師。

**熊倉純子**
くまくら すみこ
東京藝術大学音楽学部音楽環境創造科・
大学院国際芸術創造研究科教授
音まち千住の縁 プロデューサー

2015

# だじゃれ音楽研究会

## 熱タイ音楽隊の一週間

**だじゃ研が自ら世界へ飛び出した、2015年のタイ滞在を振り返りタイ！**

音楽による国際交流は、世界各地、いろいろな場面で行われている。しかし、「だじゃれ音楽」による国際交流を試みているのは、世界は広しといえど、足立区千住で活動している「野村誠 千住だじゃれ音楽祭」くらいではないだろうか。言語の共有が難しい海外の人々と一緒に、だじゃれと音楽を媒介として交流することは、果たして可能なのだろうか。そして、それはいったい何を生み出すのだろうか。

2011年より展開している、「野村誠　千住だじゃれ音楽祭」。だじゃれと音楽が結びついた「だじゃれ音楽」を、公募で集まった「だじゃれ音楽研究会」（通称「だじゃ研」）のメンバーが主体となって探求している。3年目からは、国際的な展開を迎え、インドネシアから作曲家のメメット・チャイルル・スラマットさん、タイから民族音楽学者のアナン・ナルコンさんを招聘し、各国の言語・文化・音楽を取り入れた新たなかたちのだじゃれ音楽を発表するコンサートを実施。2014年には、1010人の演奏者を公募した参加型のコンサート「千住の1010人」を足立市場で開催し、メメットさん、アナンさんに新曲を委嘱した。

そして迎えた、2015年。より双方向的なかたちでの国際交流をはかるため、今度はこちら側のメンバーが東南アジアに伺おう、という運びとなった。国際交流基金の助成を得て、作曲家の野村誠さん、だじゃ研メンバー、小鼓奏者の小川実加子さん、箏奏者の松澤佑紗さん、映像の甲斐田祐輔さんとともに、年末の12月25日から31日まで、タイ・バンコクを巡るツアーを敢行した。

バンコクでは、さまざまな人々と、さまざまな会場や形態でコラボレーションを行った。博物館のエントランスで現地の若いミュージシャンたちとのセッション、こどもと音楽家の共同作曲によるオペラ作品への参加、タイの伝統的な打楽器をつくっている村の見学、伝統音楽教育を専攻する大学生とのワークショップ、ライブハウスにて飛び入りのセッション大会、伝統的な寺院に派手なプロジェクションマッピングが施されたカウントダウンコンサートの見学、などなど……。旅の様子はだじゃ研メンバーの小日山拓也さんによる絵日記で味わっていただきたい。

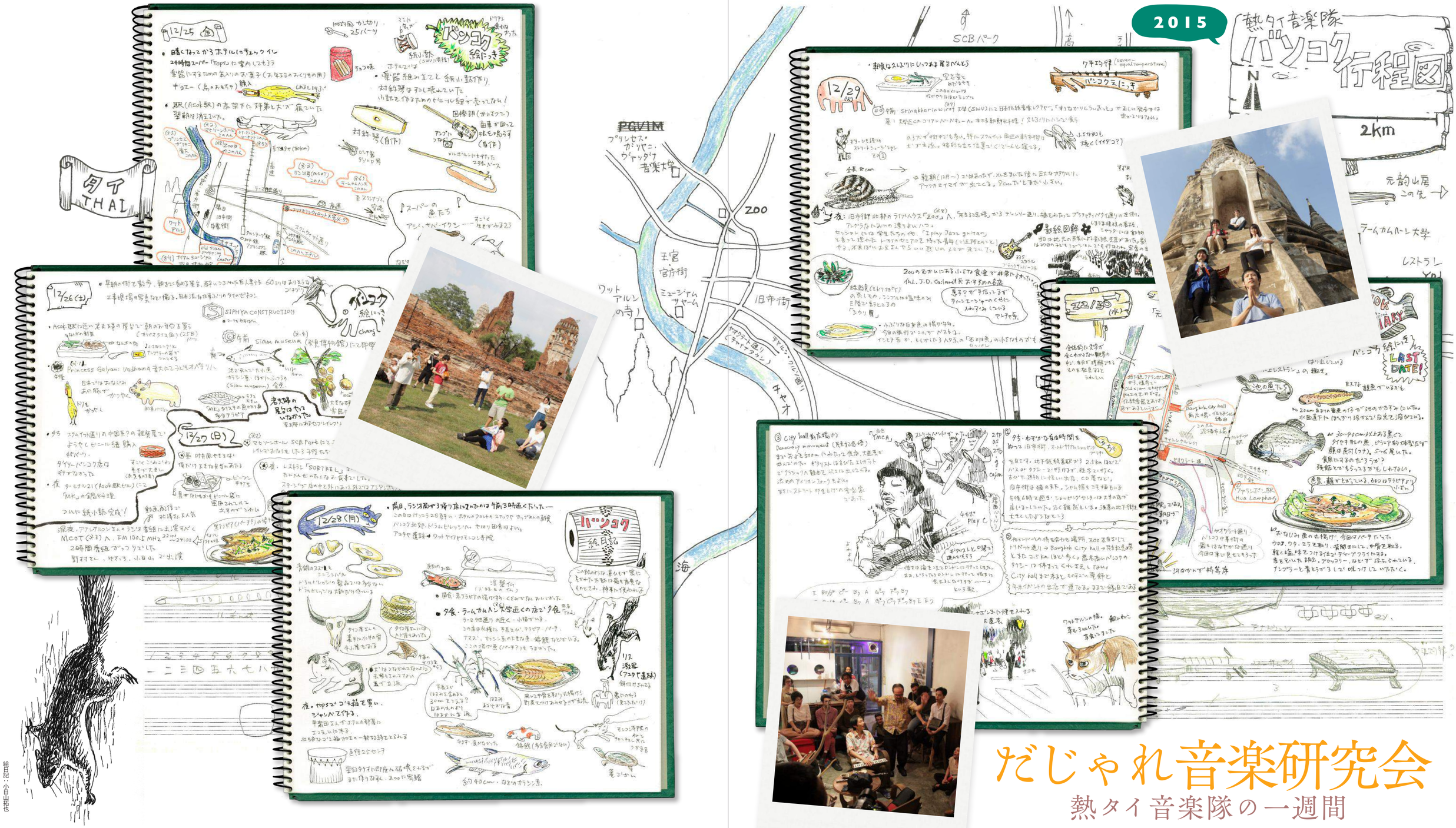
濃密な一週間を過ごし、大晦日に帰国した後、練習を重ね、タイでの経験を報告するレクチャー&コンサート「熱タイ音楽隊の一週間」を2月21日に開催。こどもオペラの一節や、大学生に教わったタイ伝統音楽のリズムパターンなどをもとに、だじゃ研によるオリジナルのアレンジを加えた演目を発表した。

この壮大なプロジェクトについてひと通り振り返ってみた後、もう一度冒頭の問いに立ち返ってみたい。だじゃれ音楽による国際交流は、果たして可能なのだろうか。そして、それは何を生み出すのだろうか。

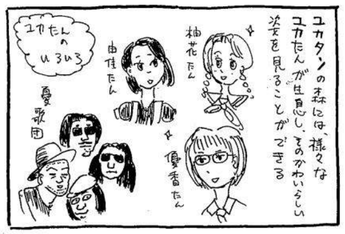
片言の英語と身振り手振りで、「だじゃれ音楽」の歌詞の意味を説明してみる。その意味が完全に理解できなくても、その言葉を響きとして楽しんでみる。そして、とにかく一緒にその場で何かをやってみる。その結果、西洋楽器を専攻しているタイの大学生が「ケロ」と「リン」で輪唱をする「ケロリン唱」を歌ったり、通りがかりにコンサートを聴きに来たお客さんが小鼓のリズムパターンを習得できる「すっぽんぽん体操」を踊ったり、帰国後には逆に私たちがタイの村祭りのリズムを見よう見まねで演奏、アレンジしてみたり……、といった不思議な光景が次々と生まれていった。そこでは、伝統文化を教え合い相互に理解し合うような大文字の国際交流ともまた違った、緩やかで豊かな交流の場が生まれていたようだ。それはきっと、だじゃれ音楽が持つ、意味の飛躍と響きの魔術によってもたらされたものに違いない。

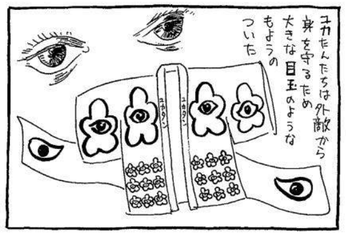
2016年の年末は、インドネシアのジョグジャカルタを訪問。新たな出会いに胸を躍らせながら、だじゃ研は、音楽による国際交流の可能性を押し広げている。

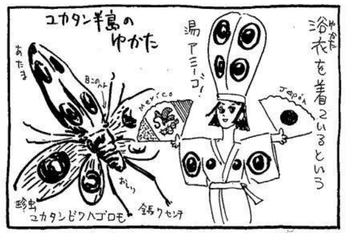
今年はどんな海外遠征の報告になるのか？
2月に開催するインドネシア調査篇
レクチャー&コンサート
**「ジャワで交流したんじゃわ」**に期待を膨らませよう。




絵日記：小日山拓也




これから開催！

## 野村誠 千住だじゃれ音楽祭

国際交流企画第４弾：インドネシア調査篇　レクチャー＆コンサート

### 「ジャワで交流したんじゃわ」

タイに引き続き、インドネシアの海外遠征へ出発した「だじゃれ音楽研究会」。
現地で触れた音楽の熱を持ち帰り、コンサートを開催します！

日　時　平成29年2月19日（日）15:00開演［開場14:30］
料　金　無料［事前申込優先・定員100名］
会　場　東京藝術大学 千住キャンパス スタジオA（東京都足立区千住1-25-1）
アクセス　北千住駅（西口）から徒歩約５分

千住・縁レジデンス

## 友政麻理子　知らない路地の映画祭

今年もショートストーリーを撮影中！
映画づくりの拠点としてきた「仲町の家」で開かれる、３日間の映画祭。

日　時　平成29年2月24日（金）18:30－
2月25日（土）10:30－／14:30－／18:30－
2月26日（日）10:30－／14:30－／18:30－
＊開場は各回30分前
料　金　無料［事前申込優先・定員20名］
会　場　仲町の家（東京都足立区千住仲町29-1）
アクセス　北千住駅（西口）より徒歩約10分

©富田了平

## アサダワタル　千住タウンレーベル 試作品［デモ］発表会

～「まちを舞台にした音楽レーベル」という発想を実現させるべく集まった「タウンレコーダー」たちが織りなす、海のものとも山のものともつかない音のメディアを、ひとまずつくってみたので、それを聴きながら語り合おう編～

日　時　平成29年2月26日（日）15:00開演［開場14:30］
料　金　無料［事前申込優先・定員50名］
会　場　安養院（東京都足立区千住5-17-9）
アクセス　北千住駅（西口）より徒歩約10分

MAP

A　野村誠　千住だじゃれ音楽祭　東京藝術大学 千住キャンパス
B　友政麻理子　知らない路地の映画祭　仲町の家
C　アサダワタル　千住タウンレーベル　安養院

【お問い合わせ】「アートアクセスあだち 音まち千住の縁」事務局
WEB　http://aaa-senju.com/contact
電話　03-6806-1740（13:00－18:00、火曜・木曜除く）
メール　info@aaa-senju.com
住所　〒120-0034 東京都足立区千住 5-13-5 学びピア21 7階

＊各プログラムの詳細は音まちwebサイトをご参照ください。
＊プログラム内容は変更になる場合がございます。あらかじめご了承ください。

## 大巻伸嗣 メモリアル・リバース
# Memorial Rebirth 千住 2016 青葉

千住で６回目の開催を迎えたメモリバ。
今回は千寿青葉中学校の生徒の想いをのせて。

### 「6年目のメモリバ」

これまで、千住のさまざまな地域をめぐってきたメモリバ。２０１６年は、10月9日千寿青葉中学校が会場となった。

今回は、企画段階から青葉中のアート部で活動する中学生とともに考え、つくりあげるという試み。花をテーマにアクセサリーをつくって衣装に取り入れるなど、参加した生徒たちの想いがかたちになった。当日ワークショップを開いたり、片付けに参加したりした感想を寄せてもらった。（写真参照）

昼の部では、お馴染みとなった「しゃボンおどり」を、いろとりどりの浴衣で着飾った地域の方々や、プレ企画から参加した児童や学生たちの「しゃボンおどり盛り上げ隊」がリードし、校庭には大きな踊りの輪ができた。また、青葉中の吹奏楽部有志と、「音まちビッグバンド」らの演奏で会場を盛り上げた。

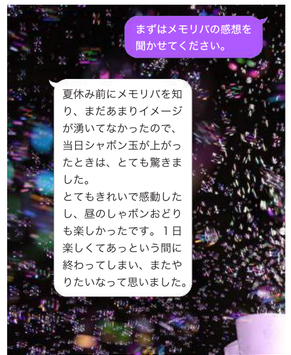
夜の部は、昼とは異なる風景が現れた。闇の中、光となっては消えるシャボン玉は校庭を美しく、はかなく彩った。

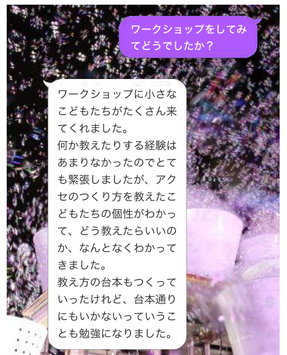
青葉中のおやじおふくろの会会長で、「大巻電機K・K」リーダーでもある寺澤昌記さんは、「今年のメモリバはとても印象深く、幻想的な風景が心に焼きつきました。無数のシャボン玉が空高く舞い上がる様子は、さながら花の種子が風に煽られて舞い上がる姿に重なりました。このイベントには多くの方々が携わって、みんなでつくり上げてきました！私もその一員として協力できたことは誇りに思います」と語った。

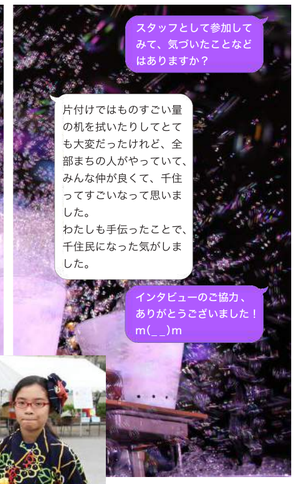
緑色のTシャツを身に纏った「大巻電機K・K」は、まちのお父さん方、東京電機大学の学生を中心に結成され、メモリバのマシンを扱い、シャボン玉を空高く飛ばす重要な役割を担っている。恒例となったプレ企画も、彼らの手で小中学校や公園などに出張し行われてきた。その存在によってメモリバは、千住のまちの風物詩となりつつある。

メモリバは姿を変えながら、さまざまな人々によって育てられ、守られ、愛され、また次の場、次の人へ、バトンのように手渡されていく。

写真：富田了平



青葉中アート部有志

## イミグレーション・ミュージアム・東京
# フィリパピポ!!

「フィリピンからの、ひとりひとり マキララ ー知り、会い、踊るー」パーティー

写真：富田了平

## 大盛況！

9月17日、東京藝術大学の第7ホールがミラーボールきらめくダンスホールに姿を変えた。「フィリパピポ!!」はフィリピンコミュニティの方たちから伝授されたデコレーションや音楽、料理などパーティーを盛り上げるエッセンスを詰めこんだオリジナルなパーティー。千住ちんどんによるフィリピンのCMソングで幕を開けると、カトリック梅田教会有志メンバーによるフィリピンの伝統的な竹ダンス「ティニクリン」、来日当時に歌手活動していた女性と音まちメンバー、藝大生による歌と演奏のコラボレーション。そしてフィリピーナの魅力に惚れ込んだ学生スタッフのリップシンクと、次々にプログラムが展開され、その盛り上がりは会場が一体となったズンバ（エクササイズの踊り）で最高潮に達した。

「フィリピンのみなさんの普段のパーティーはとってもあったかくて、誰でも包み込んでしまう溶き卵みたいな雰囲気があると思っていました。今回、出し物だけでなくその雰囲気も楽しんでいただけたなら大成功です！」と、企画を担当した藝大生の西垣友惠さん。なるほど、年齢や性別、国籍も混ざり合ってみな総立ちで踊る光景は、さながらカラフルな野菜がちりばめられたオムレツのよう。会場では「気づいたらステージ上で踊っていた」「あんなに日本人が踊るなんてびっくり」「フィリピンのことをもっと知りたくなりました」など多数の声が挙がり、思いがけない出会いと発見に満ちた夢のような2時間となった。